

## 連載 情報システムの本質に迫る 第 183 回 浦昭二先生のフロンティア

芳賀 正憲

浦昭二先生が逝去されて、今月の16日、ちょうど10年になります。この10年間の情報システム学の発展を考えると、先生が情報システム学会に与えられたベクトルの大きさと、方向性の的確さに感嘆します。

浦先生のご逝去に際し、情報システム学会では石井信明先生を委員長とし、浦先生を追悼する『人間中心の情報システム学 その歩みと未来 —浦 昭二の世界—』を編纂しました。浦先生から薫陶を受けた50名近い方々によって書かれたこの追悼集を今改めて読むと、浦先生が、まさに今道友信先生も示された学問の王道、「対象を現実の新たな環境に拡張していくこと」「つねにメタ学を考えること」を一貫して実践されてきたことが分かります。

情報システム学に関して浦先生の画期は、明らかに1982年、当時所属されていた情報処理学会から独立した形でHIS研究会を創設されたことにありました。1990年代に情報社会が真に開花したことから、その約10年前に新たなコンセプトで研究会を立ち上げられたことは、先生の驚くべき先見性を示すものと言えます。翌1983年から雑誌bitに連載された「HISシリーズ」の第1回に浦先生は研究会の起源を次のように記されています。

「HISシリーズのスタートにあたって」

“計算機システム=情報システム”と思っている人が多いようである。計算機の知識だけあれば情報システムが作れると考えるのは誤りで、それがどんな環境の中で、どのような目的に使われるのかを把握できる能力が備わっていなければならない。これは当然のことなのであるが、組織体の情報システムの設計・製作において、根強く計算機中心の発想が支配しているようである。組織体にはそれぞれの歴史があり、風土があるわけで、それに融合したシステムを作るのは並たいていのことではない。他人から与えられた変更の難しいシステムでは、組織体の活力を失うことになりかねない。では、組織体に融合し、利用者に即した情報システムの設計とはどんなことだろうか。またそれを実現しやすくするにはどうしたらよいだろうか。

このようなことに関心をもつ人々が月に1回ずつ経験談や考え方を持ち寄って、気軽に話し合うことにしたのが、1年ほど前のことである。(後略)

HIS研究会は、2005年2月まで実に23年間継続ののち発展的に解散し、研究会を母体として新たに情報システム学会が設立されました。

新学会の設立に対しては、関連諸学会から「何故、今さら情報システム学会か？」と

いう声が寄せられたようです。ある学会からは、「当会も情報システム学に取り組むので、新学会を設立せず、当学会の傘下に入りませんか」という働きかけが神沼靖子先生のところにありました。このような動きに対して浦先生は、次のように神沼先生に伝えられたとのことでした。

[関連学会との違い] に関して、「人間活動とのマッチにあり、人間の情報行動の認識を重視することにあるのではないかと考えています。」

[学会設立の狙い] に関して：

- ・ 情報への意識の向上（意識の向上があつてこそ初めて情報システムが価値を発揮する）
- ・ 人間と情報機器の共生（人間系システムと技術的システムの共生）
- ・ 情報機器の使い方の知識だけが情報教育という考え（の修正）
- ・ コンピュータ科学の知識と対象分野の知識（と参照学問分野の知識の総合性）

ここでは、[学会設立の狙い] の最後の項目、各分野の知識の総合性こそ、他の学会に対して当学会の情報システム学の価値を決定づける重要概念と考えられます。

関連諸学会は、情報システム学会に比べて規模が大きく、情報政策においても情報教育においても、日本社会のブレインとして大きな影響力を発揮してきました。しかし、現在日本の国際競争力は34位、一人当たりGDPは購買力平価基準で36位、要因として最も考えられるのが、デジタル競争力の低さです。

デジタル競争力で世界一は米国ですが、アジア諸国では、シンガポールが5位、台湾8位、韓国12位、中国15位、日本28位です。徒競走に例えると、シンガポールから中国まで4か国が3～4秒差で一団となって走っているのに、日本だけが13秒差で中国の背中を遠くに見ながら追いかけている状況です。端的に言って、日本は情報政策においても情報教育においても失敗し、国際的に劣後しました。

情報システム学会は規模が小さく、今までは社会のブレインとして十分に力を発揮することができなかったのですが、これからは、浦先生の指針にしたがって他の学会から独立し確立を進めてきた新たな情報システム学の体系を積極的に活かして、日本のデジタル競争力と国際競争力の向上に貢献していくべきと考えられます。

時間を、HIS研究会設立の10年後、1990年代初頭にもどします。

1993年1月、浦先生の慶應義塾大学最終講義が行われました。講義内容について飯島正先生が書かれています。

「最終講義の後半は、コンピュータへの過剰な信頼への警鐘と、単なるコンピュータ応用という発想から脱却し、組織・社会の仕組みに関わる情報の収集・伝達・蓄積・処理のための情報システムを研究しなければならないという強い意志を伺うことができました。」

ここでは、「組織・社会の仕組み」と情報システムの関係が、「組織・社会の仕組みに関わる情報の収集・伝達・蓄積・処理のための情報システム」となっています。この関係は、この後2000年代にかけて、表現が変化していくこととなります。

最終講義の中で浦先生は、コンピュータ（ないし技術）への盲信に、何度か繰り返し警鐘を鳴らされました。その中でも特筆すべきは、「コンピュータ中心（になってはいないか？ 人・組織・社会が中心でなくてはいけないのでは?）」というお言葉です。人だけでなく、組織・社会中心という考え方が、明確に述べられました。

島田由美子先生は、浦先生から受け取られたたくさんのお手紙やメールを宝物として大事にされています。そのなかに、最終講義から約10年後、おそらくは情報システム学会設立前後の浦先生のお考えを表わす珠玉の言葉が記されています。

「いろいろな社会・自然・人工物の仕組みを  
情報システムとしてとらえること  
が出来ます。この見方・捉え方は大切と 思います。」

「情報システム学は、「我々を取り巻く環境・状況の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉え、そこに横たわる問題を究明しそのあり様を改善することを目指す」実践的な側面を重視した学問である。（世の中→自然、生体…）」

ここでは対象が、「いろいろな社会・自然・人工物」「我々を取り巻く環境・状況」「世の中→自然、生体…」などと述べられています。当時、浦先生は、今道友信先生に私淑し、さらに親炙されていたので、エコエティカの「生圏」という考え方を、対象として強く意識されていたことが推察されます。また上記の表現では、対象の「仕組みを情報システムとしてとらえる（考察する）」という画期的な考え方が示されています。これらの考え方を統合して、浦先生が情報システム学会誌で提唱された情報システム学の概念が成立したと考えられます。

浦先生をはじめ、神沼、細野、宮川各先生が参加され、1か月半に1度ぐらいの割合で情報システム学の議論をする「いざないの会」が開かれていました。その会で浦先生から手渡された資料に、カナダの大学教授、ダニエル・ポール・オドネル氏の書いた「ウェブの新領域において主要な要素となるのは、科学ではなく人文科学である」と題する文献がありました。2010年7月に執筆されたもので、浦先生が共感され、配られたものと推察します。

文献の冒頭は、次のように始まっています。

「地元の高校の3年生のクラスで、新しいデジタル経済のキャリアに関して話すように頼まれたとします。あなたは、彼らが何を研究するよう促すでしょうか？ コンピュ

ータサイエンス？ 工学？ 哲学？ 古典？ ケルト族の研究？ それらの最後の三つがどれくらい役に立つか判明できて、あなたは驚くかもしれません。」

この文献の主旨は、次の文章によく表れています。

「新しいデジタル経済を非常に興味あるものにし、かつこれまでのものとは異なったものとするには、人文科学者や社会科学者が常に研究してきた問題を強調することです。その問題とは、組織とコミュニケーション、グループと個人の間のバランスを見つけること、そして文化的な仕事の生産・提供・共有です。

インターネットはもう工学の問題が主要ではありません。その基本的な技術的構成要素は20年間定着しています。新しいのは、この技術がどう使用されるかということです。」

浦先生は、卓越した科学者であり工学者ですが、しかし「世の中の仕組みを情報システムとして考察し、その本質を捉え、そこに横たわる問題を究明しそのあり様を改善する」ためには、人文科学者や社会科学者が今まで研究してきた問題を、情報システム学としても重点をおいて研究することが必須であることを深く認識され、この文献を提示されたものと思われま

その後、情報システム学の研究は、浦先生の示された指針にしたがって着実に進んでいきました。

現在編纂しつつある『新情報システム学序説』の改定版では、世の中の仕組みの構造を、文化人類学、言語学、言語技術、社会心理学、経済学等の知見をもとに解明、三つの座標軸により、日本、米国それぞれの世の中の仕組みを位置づけ、情報技術との親和性の差から、両者の国際競争力の帰趨まで、明確に説明しています。人文科学者や社会科学者が今まで研究してきた問題を、情報システム学としても重点をおいて研究することが可能になりました。

浦先生が逝去されて10年、何よりもこのことをご報告申し上げたいと思います。

設立の経緯で見たように、情報システム学会は、他の大きな学会の傘下に入るという選択肢もあったのに、「独立した学会としなければ、真の人間中心の情報システム学は確立できない」という、浦先生の強い意志のもとに発足した学会です。情報社会が進展する中、このような学会が少しでも停滞することは許されません。日本社会に目に見える重要な貢献をして情報システム学会の存在感を高め、広範囲の関係者に情報システム学会に結集して頂き、この学会をさらに発展させていきましょう。

連載では、情報と情報システムの本質に関わるトピックを取り上げていきます。

皆様からも、ご意見を頂ければ幸いです。